

令和三年度

海外帰国生入学試験問題 国語

令和二年十二月十三日実施

試験開始の合図があるまで問題用紙は開かず、左記の注意事項をよく読んでおきなさい。

- 一、問題は二十二ページまであります。足りないページや、印刷のよく見えないページがあったときは、手を上げて申し出てください。
- 二、解答用紙は別になっています。答えはすべてそこに記入してください。
- 三、解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。
- 四、問題用紙には、受験番号・氏名を書く必要はありません。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を変えているところがあります。)

うちの工場は、金属部品の加工をしている。それらは数ミリ単位のものから、大人が数人がかりでかかえるような大きなものまであつて、さまざまな部品をあつかっていた。

お父さんも天馬も、もう作業着に着がえていて、準備万端ばんたんという感じた。紺色こんいろの作業着の胸ポケットには、「天馬」とオレンジ色の刺繡ししゅうがしてあつた。ほかの人はみんな名字なのに、天馬だけは、決して名字を使わずに名前でおしとおしている。

葛木天馬……うちの居候いせうろう。まだ十七歳さいなのに、働いている。

天馬がうちに来たのは、十五歳のときだった――。

あれは、ちょうど二年前の今ごろで、強い雨が降る夕方だった。

工場の隣となりにあるうちに天馬を連れてきた大人は、ワイシャツにネクタイ姿のきちんとした身なりの人だった。中学校の校長だといふその人は、白髪頭しらがでひよろりと背が高く、どこにでもいそうな人のよいおじいちゃんに見えた。

校長先生は少年に正座するよう①うながして、自分も姿勢を正すと、ちゃぶ台をはさんでお父さんとむかいあつた。

空気がぴんつとはりつめて、雨戸がガタガタとゆれていた。

「どうかこの子を、②ここで使つてやつてはもらえないでしようか」

ひざの上に手をおいた校長先生が、その細い腕うでをつつばらせて身を乗りだした。

小学六年生だったあたしは、ふすまからのぞき見ながら、その子をじっと見つめた。

こんな時間に子どもを連れてくるなんておかしい。何かとんでもないことが起こりそうで、あたしはぐつと息をつめた。

「もちろん、最初は見習いからでけっこうです。使いものにならないければひきとります。身元はこちらに書いてあるとおりますが、わたしが保証します。ちよつと荒れた時期もありますが、心根はやさしく、まじめな少年なんです」

校長先生は③ たたみかけるように、言葉のかぎりをつくして訴えた。ていねいな言い方に、お父さんは恐縮している様子だ。

その子の髪は、根元は黒いのに途中から金髪で、毛先はかなりいたんでいた。着ている服もだらしくすよごれている。暗くにごった目は半分ふせられ、外の世界をいっさい受けいれないといっているようだった。

やりとりをききながら、子どもなのに働いていいのだろうか、あたしはふすまの向こうに耳をすませた。

校長先生の話によると、その子は何度も「施設」というところからにげだしているという。にげだしたということは、何か悪いことをしたにちがいない。見かけからも、そんなふうにししか思えなかった。

「本人は働きたいといっています、今の日本では、この年でやとってくれるところはなかなかありません。④ おかしなところで働いて、人生を狂わせることにもなりかねない。社会から逸脱してしまっただけだと思おうと……残念でならないのです」

学校の先生といったら、勉強を教えるだけだと思っていたあたしは、ここまでしてくれるのかと感心した。

前髪のすき間から、少年がこちらを見て、ふいに目があつた。

だれも信じない。何も信じない。自分もどうなったってかまわないというような……絶望的な目。そんな⑤ さすような視線から、あたしは目をそらすことができなかった。

「どうか、この子を助けてあげてほしい。⑥ いろいろあつて、気の毒な子なんです」

校長先生は、ダメおしするようににじりより、頭を下げた。

少年の目が動いて、校長先生をにらむ。その目は、余計なことをいうなど訴えていた。^⑦

「先生、「A」を上げてください。わたしは、先生のおかげで今があるようなものですから。家をとびだし、行くあてもなかったわたしをすくってくださったのも先生だ」

あたしは、「B」を上げそうになった。

無口で気むずかしいお父さんが、家出をしたなんて信じられない。まさか、不良だったとか？

だとすると、このおじいちゃん先生は、問題のある子の面倒見がいい人なのかもしれない。

お父さんは少年を見て、書類に「C」を落とした。

「でも、いくらなんでも住み込みっていうのは……。うちには、娘がいますから……」

お茶を出してお盆をかかえていたお母さんが、顔をくもらせる。

娘ときいて、どきつとした。

校長先生は何かをいいかけてのみこむと、小さな背中を丸めて、そつと息をはきだした。^⑧

正座をしている少年のひざが、小刻みにゆれはじめる。

自分のことを無視して話が進められていることにイラついているようだ。

お父さんが顔を上げて、少年のほうに身体をむける。

「金属は、好きか？」

いきなりそれか……。

不器用でストレートな言い方に、あたしはため息をついた。もっと気のきいた言葉があるだろうと思う。

でも意外なことに、その子は顔を上げ、うつろだったその目には、^⑨かすかな光までさしこんだ。

「金属といつても、素材はさまざままで、いろいろな部品に加工される。どんなに小さな部品も、機械には必ず必要なものだから、ネジ一本だってバカにはできない。うちで作っているのは、そんなものだ」

朴訥^{ぼくとつ}としたお父さんにしては長いセリフだった。でも残念ながら、金属に情熱を燃やすのはお父さんくらいのもので、ふつうの人は興味をもたないだろう。ましてや、あんな男の子に、お父さんの言葉なんて響^{ひび}くわけが……と思いかけたとき。

「好きかどうかは、まだ、わからないけど……」

少年が、はじめて口を開いた。やつと意見を求められたことに、ほっとしているように見える。だから慎重^{しんちょう}に、ひとつひとつ確認^{かくにん}するように言葉にした。

「だれの世話にもならず、生きていけるなら、なんでもいい」

何をいつてるんだろう。子どもなのに、ひとりで生きていけるわけがない。

でも、少しだけ感動した。

あんなさびれた工場で働くなんて、鼻で笑われるだろうと覚悟^{かくご}していたから。

見た目だけで、「きつい、きた^⑩ない、きけん」の3Kに、「給料が安い」というおまけまでつけて、勝手なイメージをつくりあげている人は少なく^⑪ない。そのせいで、工員を募集^{ぼしゅう}しても若い人がよりつか^⑫ないと、お母さんがなげいていた。

ボロい工場も^⑬こわいお父さんも苦手だけど、そこまでいわれるほど悪条件じゃないことは、あたしだって知っている。

少年の好感度が、あたしの中でぐんつと上がった。

「でも、住み込みなんでしょう？ 琴葉が……」

お母さんは、まだそこにこだわっている。

「琴葉、来なさい」

大きな声でお父さんによばれて、目を見開いた。忍び足しのあしで廊下ろうかに出て、階段でタンタンタンと足踏あしぶみし、たった今来たかのようにふるまう。

A

「琴葉は、この少年がうちに住むことを、どう思う」

お父さんは、なんの説明もせずいきなりいった。

まさか、あたしがきいていたことを知っている？

どう思うって……。

B

こたえると、

「琴葉が決めるんだ」

と、きびしい声が返ってきた。

お父さんは、たまに、あたしの心をためすようなことをいう。そんなとき、^⑭優柔ゆうじゆう断つぎなあたしはこまってしまい、だまりこむ。

まるで、少年の運命はあたしにかかっているといわれているようで……。そんな大切なこと、決められるわけがない。だまりこんでいると、その子は目をふせ、わずかに首をふった。

「と、いわれたような気がした。」

D

とつさにそうこたえて、あたし自身がびっくりする。

お父さんがうなずき、お母さんはため息をついた。

「では、まずはためしということでは」

お父さんのひと言で、すべては決まった。

それからその少年……天馬はうちに住み、工場で働くことになったのだ。

家族がだれなのか、どこにいるのか、あたしは知らない。

帰るとき、天馬は「ありがとうございます」といねいに頭を下げ、あたしにも小さく顔をふせた。

(工藤純子『てのひらに未来』による)

問1 — 線①「うながして」と同じ意味の言葉を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ うなづいて ロ しむけて ハ 声をかけて ニ 注意して

問2 — 線②「ここで使ってやっではもらえないでしょうか」とは具体的にどういうことを頼んでいるのか。次の文の【 】に当てはまるように、十字以上十五字以内で答えなさい。

【 】ことを頼んでいる。

問3 — 線③ 「たたみかけるように」と同じ意味の表現を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 相手に隙すきを見せず、重々しい態度をとり続けるように
- ロ 相手に不信感を持たれず、礼儀正れいぎただしさをみせるように
- ハ 相手にへつらうことをせず、気持ちによりそうように
- ニ 相手にゆとりを与あたえず、立て続けに働きかけるように

問4 — 線④ 「おかしなところで働いて、人生を狂わせることにもなりかねない」という校長先生の言葉から、どのようなことが読み取れるか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ お父さんの工場が立派なので、少年一人くらい雇やとえる余裕よゆうがあるということ。
- ロ 金属工場の仕事なら真面目に取り組めば、少年でも十分に働けるということ。
- ハ 校長先生がお父さんを信しん頼らいして、少年を預けられると思っおもっているということ。
- ニ 大金が入るような仕事だと、少年が将来について甘あまくみてしまうということ。

問5 — 線⑤ 「さすような視線」について説明した次の文の【(1)】【(2)】に当てはまる四字の言葉をそれぞれ文章中からぬき出して答えなさい。

・「だれも信じない、何も信じない」という、【(1)】とのかかわりを断たつような考えに支配しかれた、【(2)】印象を感じさせる視線。

問6 —線⑥「いろいろあって、気の毒な子なんです」という校長先生の言葉を、少年は—線⑦「余計なこと」ととらえているが、その理由は何か。次にあげる三つの条件を使って答えなさい。

・「同情」という言葉を必ず用いること。

・「校長先生が」という書き出しに連なるように書くこと。

・三十字以上四十字以内で答えること。

問7 【A】 【C】 に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。(同じ記号は二度使えない。)

イ 手 ロ 目 ハ 声 ニ 眉まゆ ホ 腕 ヘ 腰こし ト 頭

問8 —線⑧「小さな背中を丸めて、そつと息をはきだした」に表れている校長先生の気持ちとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ いくら言っても無駄むだだという腹立たしい気持ち。

ロ 関係のない人に口をはさまれてあきれた気持ち。

ハ ここも無理であったかというあきらめの気持ち。

ニ 自分の説明では理解されなかった残念な気持ち。

問9 — 線⑨「かすかな光までさしこんだ」とあるが、どうしてか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ うそれでも金属が好きだと答えればここで働くことができると思ったから。

ロ 大人同士の話し合いでなく自分の意見を聞いてくれることになったから。

ハ 工場で働く人が足りないとわかっていやな施設を出られると考えたから。

ニ 中学生が金属工場で働くことを認めてくれる大人がいるとわかったから。

問10 — 線⑩～⑫の「ない」と同じ性質の「ない」をふくんだ文を、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

イ 決まりを破ってはならないと何度も言っておいたはずだ。

ロ ひどいケンカをしてからあの子との会話はまったくくない。

ハ 妹ばかりお母さんがかまうのでせつない気持ちになった。

ニ 昨日の出来事に関して私はあなたにでも話したくはない。

問11 — 線⑬「こわいお父さん」と同じように「お父さん」を説明した表現を、文章中から十字以上十五字以内でぬきだして答えなさい。

問12

「A」

「

D」

に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

イ あたしは……いいよ

ロ お父さん、なあに？

ハ 答えはわかっている

ニ そんなの無理

ホ どっちでも、いいけど……

問13

――線⑭「優柔」「断」が「ぐずぐずして物事の決断がにぶいこと」という意味になるように、に当てはまる漢字一

字を答えなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を変えているところがあります。)

書かれている文字や文章を声に出して読むときに、注意しなければいけないことは、たくさんあります。その中の一つに、漢字をどう読むかがあります。

① 同じ漢字や漢字熟語でも複数の読み方があり、時には読み方の違いによって、意味が異なってしまう場合もあります。漢字は見れば意味がわかるので便利であると言われます。漢字は「②」文字です。視覚に訴えて、意味や概念を運ぶ装置なのです。その漢字を音にすることは、読んで伝える立場からすると、それほど簡単なことではなく、誤解を招くこともあるのです。

もともと文字がなかった日本には、中国から漢字が入ってきました。そして、^③日本の言葉——和語——に、意味の近い漢字をあたったり、音が似ている漢字を使ったりして表すようになりました。そこで、今でも当て字を使ったことばが多くあります。また、読み方は後回しにして、とりあえず漢字の意味だけを意識した、漢字熟語・造語も生まれています。何とも、音声表現者泣かせですね。私たちが、自分の声で読んだり、話したりして伝えるときに、いちばん注意するのは、聞き手のことです。聞き手が聞いた瞬間に、意味や内容を理解できなければなりません。そのために、音だけでは、つまり、聞いただけではすぐにわからないことばや、難しい漢語・漢字熟語などは、やさしいことばに言い換えたりします。ところが、すべてそうできるかという点、そうではありません。公式文書や^④文学作品などは、音声による伝え手が自分の判断で勝手に変えることはできません。

何年か前のニュースの中に次のような文がありました。それはエレベーター事故に関する内容です。

「エレベーターの扉が開いたまま動いてしまった」

問題は「開いたまま」をどう読むかです。「あいたまま」でしょうか、「ひらいたまま」でしょうか？

このニュースを担当した「A」はいろいろ調べました。どの辞書を見ても、両方の読み方が載っています。しかも意味も同じなのです。違いがなければ、どちらでもよいことですね。ところが同じニュースを、別の「A」が別の時間帯に読んだときに、違う読み方をすると、聞き手つまり視聴者が違和感や疑問を持ってしまふかもしれないという心配があります。そこで私も急いで調べてみました。すると1冊だけ、「ひらく」について、次のような説明をしている「類語辞典」がありました。それによると『戸がひらく』という表現は、ふつう、引き戸ではなく、押したり引いたりする戸について用いられる」と出ていました。この説に従えば、エレベーターの場合は「A⑤」がよいのでしょうか。それからしばらくは、私たちはこのニュースに関しては「扉が「⑥」まま」と読んでいました。しかし、最近では「ひらいた」「あいた」のどちらも使われているようです。たとえば、辞書に載っていても、それだけが正しく、その他は誤りであると簡単には排除できないものなのです。聞き手が理解できたか、どう認識したかが大切なのです。へい

やはりニュース原稿にあった例です。「冷水を浴びせる」の「冷水」は「れいすい」か「ひやみず」という問題です。どの辞書を見ても「れいすい」も「ひやみず」も「冷たい水」のことで載っています。さらに、ある辞書では、「れいすい」の項に「冷水を浴びせる」と用例が紹介されています。その意味は「⑦」のようなことをする」とありました。① ≧ 別の辞書では「ひやみず」の項に「冷水を浴びせる」と用例が載っていました。② ≧ 「ひやみず」の意味を「冷たい処遇の意にもたとえる」と説明している辞書もあります。へい

③ ≧ 「ひやみず」ということばを使った慣用表現に「年寄りの冷や水」があります。意味は「(老人が冷水を浴びることの意) 老人には似合わない元気のよいふるまいや、高齢に不相応な危いことをするのを、ひやかしたり警告したりするときという」(精選版

日本国語大辞典」とあります。これに関連して、面白い話があります。「年寄りの冷や水」の語源説の一つです。江戸時代のこと、夏になると、お椀わんに冷たい水と砂糖、それにもち米の粉で作った団子を入れたものを売り歩いていました。それを「ひやみず」と呼んでいました。その「ひやみず」を食べた老人がおなかを壊こわすことが多かった。そこで「年寄りの冷や水」が生まれたというのです。

へハへ

話が少し逸それてしまいました。このときの私の提案は「れいすい」にしました。しかし確信はありません。大切なのは、聞き手に違和感なく理解してもらえるからです。一つのことばや表現は、全員が、同じように理解・解かい釈しゃくしているわけではありません。同じことばでもそれぞれの経験や生活環境かんきやうの違いによって、その認識に理解やズレはあるものです。へニへ

私たち「A」の、読んで伝える仕事の一つに「朗読」があります。小説や随筆ずいひつ、詩などを朗読します。この場合、特に漢字の読み方には気を使います。作者の意図、描えがかれている作品の世界をできるだけ忠実に、作者に代わって音声で伝えなければなりません。こうした作品の中には、当て字や造語なども出てきます。文字を見れば、作者の思いや情景を察することもできます。しかし、それをどう音声にして読むかは難しいのです。文学作品などは造語や当て字以外にも、特別な読み方をさせることがあります。そのような場合、作者がふりがなをつけています。ふりがながない場合など迷ったときには、同じ作者の別の作品を読んでみます。時代小説ですと、ほかの作者の作品を参考にすることもあります。ですから、多くの作品に接しておくことも大切ですね。

小説に出てくる漢字の読み方で、例に挙げられるのが、「⑧」の『雪国』の冒頭ぼうとうです。【国境の長い長いトンネルを抜ぬけると雪国であった】これは誰だれでも知っています。では出だしの「国境」は何と読んでいのでしょうか。「⑨」か「こつきよう」か。意見が分かれています。『雪国』の冒頭は「⑨」か「⑩」と読むべきと主張する人は、少なくともこの作品に登場するトンネルは清水トンネルのことであって、越後国えちごと上野国こうずけの境にあるのだから「⑨」か「⑩」である。日本の中に主権国家の境を示

す「こつきょう」などないという説です。ところがほかの文学作品の中には「こつきょう」と読ませるものもありますし、辞書の中には「こつきょう」の説明の中に「日本においては、近世まで ギョウセイ上の一区画をなした地の境界をもいった」と載っているものもあります。そして「上越こつきょう」「信越こつきょう」という言い方があるという指摘もあります。特に作者からの指定がない場合はどうすればよいのでしょうか。私は歌も含めて、文学作品などの場合、理屈だけでなく、音感・感性といったものも大切だと思っています。ただし、その感性は自分勝手な想いではありません。常識や知識に ウラ打ちされたものでなければなりません。これまでの デントウや慣習、時代の変化にも敏感でいたいものです。

(梅津正樹『漢字を声に出して読むときに』による)

問1 — 線①「同じ漢字や漢字熟語でも意味が異なってしまう場合もあります」とあるが、その具体例として挙げた次のⅠ・Ⅱの熟語について、()の中に示されていない読み方を、ひらがなで答えなさい。

- Ⅰ 初日(しよにち) Ⅱ 人気(にんき)

問2 「②」に当てはまるように、次に挙げる六つの漢字のうち二つを組み合わせ、熟語を作りなさい。

≪ 形 / 表 / 音 / 象 / 意 / 解 ≫

問3 — 線③「日本の言葉くなりました」とあるが、このようにしてできあがった言葉の書き表し方を用いて作られた、日本最古の歌集の名前を正しい漢字三字で答えなさい。

問4 ー線④「文学作品などは、くできません」とあるが、それはどうしてか。次の文の【ア】く【ウ】のそれぞれに当てはまる漢字二字の語を文章中から探し、理由の説明を完成させなさい。

- ・正しい読み方をするので、そこに描かれた作品の【ア】や作者の【イ】を、聞き手に誤解を与えないような【ウ】で伝えることになるから。

問5 文章中に三つある「A」に共通して当てはまる、カタカナ六字の職業名を答えなさい。

問6 「⑤」・「⑥」に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ ⑤ あいた・⑥ あいた ロ ⑤ あいた・⑥ ひらいた
- ハ ⑤ ひらいた・⑥ あいた ニ ⑤ ひらいた・⑥ ひらいた

問7 次に挙げた一文を、文章の中からぬき出してある。元の場所に戻すには、ヘイくくヘニくのどの場所が最も適当か。一つ選んで記号で答えなさい。

- ・ますます判断に迷います。

問8 「⑦」に当てはまる表現として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 気がおけない ロ 気がとがめる ハ 人の気をそぐ ニ 人の気をひく

問9 ≪ (1) ≪ ≫ ≫ (3) ≫ に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

イ すると ロ そして ハ たとえば ニ ところが ホ ところで

問10 「⑧」に当てはまる、小説『雪国』の作者を、次の中から一人選んで記号で答えなさい。

イ 村上春樹 むらかみはるき ロ 宮沢賢治 みやざわけんじ ハ 夏目漱石 なつめ そうせき ニ 川端康成 かわばたやすなり

問11 文章中に三つある「⑨」に共通して当てはまる、「国境」の読み方をすべてひらがなで答えなさい。

問12 ≪線⑩「ギョウセイ」、⑪「ウラ」、⑫「デントウ」のカタカナを正しい漢字に直して答えなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を変えているところがあります。)

俳句はたったA音の最も短い詩です。文字数が限られているため、描きたい風景、光景、想いをすべて言葉にするわけにはいかず、「省略」せざるを得ません。散文である小説やエッセーなどと(1)一線を画す俳句の本質、省略について学びます。

①言うべき点を押さえ、不要な表現を省く

俳句をはじめたばかりの人によく見られるのが、Bになっている句です。

左の句は、大根の葉が眼前の小川を流れていく様子を詠んでいます。大根を洗っている行為、どんな大根なのかという描写、どこで洗っているのかなどの要素は省略され、流れる大根の葉のスピードにのみ焦点が当てられています。

言うべき点を押さえ、(2)不要な表現や素材を省く感覚を磨いていくと、「○○が○○した」というできごとの説明や報告で終わらない、映像で見せる俳句が詠めるようになります。

C 流れ行く大根の葉の早さかな
高浜虚子

②季語、切字に託して省略する

①で挙げた句は下五の「早さかな」で、「早いことだなあ」と詠嘆しています。切字の「かな」に(3)言いたいことを託し、それ以上は言わずに省略しているのです。

次の句は、季語に託している例です。晩夏の季語「逝く夏」には、夏の終わりを惜しむ気持ちや、さみしいと思う心が詰まっています。ですから、(4)「逝く夏」を切字「や」を使って詠嘆するだけで、その気持ちが伝わるのです。

(5)切字や季語の力を借りて、託して見るようにするのが余計な説明を省くコツです。

逝く夏や夕陽あたる松の幹
安住敦

③基本的には詠み手の「私」は省略されている

俳句は、「一人称」が基本で、主語である「私」は省略されています。句のなかの切り取った光景を見て、何かを思っているのも「私」ですから、「見る」「思う」なども(6)あえて書く必要はありません。基礎知識として覚えておきましょう。

しかし、本来は省略される主体を巧みに使い、作者の志を強烈に打ち出した、次のような句もあります。「落椿」と自分の行く末を重ねた意思表示です。俳句では、「私」の意味に「我」「吾」などを用います。

D 落椿われならば急流へ落つ
鷹羽狩行

(堀本裕樹『五七五で毎日が変わる！俳句入門』による)

問1 Aに当てはまる数字として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 十二 ロ 十七 ハ 二十四 ニ 三十一

問2 ー線(1)「一線を画す」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 頭ひとつぬきんでている ロ 同じ美意識を求めている

ハ 違いがはつきりしている ニ 比較ひかくの対象にはならない

問3 Bに当てはまる言葉として最も適当なものを、文章中から五字でぬき出して答えなさい。

問4 ー線(2)「不要な表現」とあるが、次の中から大根に関する「不要な表現」に当たるものを、一つ選んで記号で答えなさい。

イ 白い大根 ロ 小さな大根 ハ 葉のついた大根 ニ 汚よごれた大根

問5 ー線(3)「言いたいこと」とは何か。ここより前の文章中から十二字の表現を、ぬき出して答えなさい。

問6 Cの俳句の季語をぬき出し、その季節も答えなさい。

問7 — 線(4)『逝く夏』を切字『や』を使って詠嘆するだけで、その気持ちが伝わるのです。」とあるが、なぜ気持ちが伝わるのか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 俳句に絶対必要な季語を切字を使って強調することにより、読む人に重要なポイントだという意識を^{あた}与えることになるから。
- ロ 作者が独特の季語を使うことにより、他の俳句にはない特別な感情が、その句を味わう人の心に力強く届くようになるから。
- ハ 「逝く」という「死」を感じさせる季語を選んだことにより、読者が身を切られるような悲しみまで味わうようになるから。
- ニ すばらしい俳句によく用いられている切字には、目にただけで感動の中心がその言葉にあると気づかせる働きがあるから。
- ホ 長い年月をかけて、季語に込められている思いや具体的なイメージによって読者に共通の感情を呼び起こすことになるから。

問8 — 線(5)「切字」とあるが、切字が使われている俳句を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 鐘^{かね}ひとつ売れぬ日はなし江戸^{えど}の春 宝井^{たからい}其角^{きかく}
- ロ 五月^{さみだれ}雨を集めて早し最上^{もがみがわ}川 松尾^{まつお}芭蕉^{ばしょう}
- ハ 島々に灯^ひをともしけり春の海 正岡^{まさおか}子規^{しき}
- ニ とんぼつり今日はどこまで行ったやら 加賀^{かがのち}千代女^{よじよ}

問9 ー線(6)「あえて」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ いやいや ロ ますます ハ ゆめゆめ ニ わざわざ

問10 Dの俳句の季語をぬき出し、その季節も答えなさい。